

「保育の眞諦」を聴きよて (三)

京都市 平安女學院保育科

大塚 喜一

六二

前號で今夏のお話に就ての第一印象も云ふべき大體の感想を書かせて頂きましたので、これから實際の細かい一に就て皆さんに考へて行きたいと思ひます。こうして考へて行きます中心はいつも前に申しました「保姆のほたらき」をねらつてゐるのであります、全體の有機的統一といふ事をいつも念頭に置きつゝお話し各部分々々を見て行つてゐるのであることを特に始めに申しておきます。

註文中(一)内の數は九月號の參照頁數と御承知下さい。

教育に於ける目的と對象との

相關々係に就て

先づ、「目的に熱心であるか、對象に忠實であるか」を對照して話され「幼稚園保育と云ふものゝ特質は、教育の色々な種類の中で、目的と對象との關係に於て何處迄も對象本位に計畫されてゆくべきものである」(二六)と斷定せられた

所はよくわかりました。それから進んでこのお話の全體少くも第一章の全體の終り迄ずつと聴いてもう一度讀み直して見ました時に、保育の眞諦に至り得るにはこの對象本位の立場に立ちつゝこゝへ教育目的がさういふ風な關係に於て結びついて來るものかと思ふのであります。(一五—一六頁三〇頁三四頁等その内容の細かな所は本文にて段々解説してゐられますから皆さんもおわかりの事と思ひますが、こゝをすつと突進めて考へて來て「幼稚園に於ける保姆の位置」に迄來た時、「所が、目的は目的でありますけれども、保育眞諦で相手を或る所迄進め、それからそれれへこやつて行くならば、實に細かく氣が付かなければならないのであります」。(三四)と云はれてゐます所は、目的といふものが保姆の心遣ひの中にさういふ風に入つてゐるのでありませうか。その直ぐ次に書かれてゐます所は、子

供本位に行かなければならぬところからハッキリ云つてゐられる保姆の努力であります。若しこれ少し違つた意味で、目的をも考慮に入れながらも幼児の自然なる生活形態を壊さないやうにさせるならば、そこに單に「自然」を「自由」を尊重するといふ一通りの苦勞以上に、更に一層細やかな保姆の心遣ひが必要なるのですかとお尋ねしたいのであります。丁度一六頁の「幼児の生活」の分類の中で……によつて分たれた後の³、4に迄進んで参りました時に、目的を對象との關係はさういふ風になつて來るのであるかといふ事を、このお話から充分に教へられたいと思ふのであります。

『生活と生活で生活へ』(一〇)を云はれた御言葉の意味を解明してゐられる所に先生の中心思想を學び得ると思ひ、今考へて居ります問題を念頭に置いて反復熟讀して見ます。『目的を、對象へ、その生活に忠なる意味に於てさう持つてゆかうか』を云ふ所で、我々が親が子を思ふ様に眞に子供に忠實な没我的態度で望んで行つた時は、先づ相手の生活の自己充實を充分にさせてやたりにさういふ心が自然の人情として湧いて來ると思ふ。従て、豫め引込ましてあつた教育

目的をそこへ持ち出すのではなくして、對象に忠なる一本調子の一元的な立場で進んで行つた時に、當然幼児の生活の自己充實に信頼して出來るだけの之を發揮せしめる様に努力しやうといふ態度になつて來るものと思ふのです。(一)で先生は「信頼」をいふ語を繰返して述べてゐられますが(二六)これは實に保姆の態度として大切であると思ひます)それを立場を變へて目的の方から見れば、對象の現狀に最近接の直接目的として「幼児の生活の自己充實」つまり「生活へ」をいふ事になるのでせう。幼稚園令第一條の中にある「心身ヲ健全ニ發達セシメ」をいふ事は幼稚園のみならず小學校に於ても重要な目的の一たるに相違ありませんが、小學校に於ては此目的の爲に特に體操を其他の學課を兒童に課するに比して、幼稚園に於ては幼児の未分化の生活を尊重する立場から先づ幼児自身の生活の自己充實をいふ事を目的とする事になる。斯様に考へて來ますと、目的は對象に内在するものであつて、幼児の場合は潜在的ではあるが年が長ずるに従つて顯在的となるを考へ得られるのでせうか。(本誌第三十卷第五、六、七、十號「兒童を教科課程」参照)。

福島政雄先生はその名著「日本女子教育學」に於て「親心
 子心の融和」より教育を説き起され、一轉して教育の目的に
 就て次の如くに記して居られます。

「勿論、教育といふからには、そこに一定の目的が考へら
 れなくてはならない。被教育者のもつてゐる身體及精神
 を十分に發達させること、社會國家の一員として有爲有
 能な人間たらしめる事等は、當然その目的として考へら
 れる事である。そしてその目的を遂げる爲に色々な計畫
 がめぐらされる。何を教へたらよいか、さう教へたら有
 效か色々なに討究されて、最もよい手段によつて最も有
 用な事が教へられねばならぬ。しかも教育が最も効果を
 あけるのは、教育者がこの目的の中にあつてその目的を
 忘れ、この手段の中にあつてその手段を忘れ、自らが教育
 者であるといふ事すら忘れて、たゞ被教育者といつ心に
 なつて働く時にのみ、その實效を擧げる事が出来るので
 ある」。

(同書五乃至六頁)

最後に倉橋先生に特にお尋ねいたします。先生が本誌に
 始めて巻頭の言を掲げられました時(昭和六年一月號)「人

間教育」を題し

「人間を人間へ教育しつゝあるといふことは、我等の、一
 日も一刻も忘れてならない事である。又此の本念に於て
 のみ、我等の日々の業務が、ほんさうに意味づけられる。
 或は、この故にこそ我等の努力が生命づけられるといふ
 ものである。

教育の必要性を、それらの方面に於て、い
 ろ／＼に主張する論もある。しかし、我等の責任感の出
 発も歸結も、此の教育太本の自覺によつて、始めて嚴か
 である。幼児に俱にあそび暮しつゝ、此の人間教育の嚴
 かさに生きるもの、それが幼児教育者である」。

上述べられました所から見れば、今迄述べて來た目的と對
 象との相關關係の問題は如何に思念せられ實踐せらるべき
 で御座いませうか。「一刻も忘れてならない」この仰せに副
 ひ得る底に身心に體して幼児に俱にあそび暮すには、
 さうしてもこの所がよく體認されてゐなければならぬ
 と思ひますので、御教示の程特にお願申上します。

(昭和八、九、二二)